

國學院大學學術情報リポジトリ

談話室 駆け抜けた33年

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 上山, 和雄, Ueyama, Kazuo メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000235

駆け抜けた33年

上山和雄

手元に昭和63年1月号の『國學院雑誌』があり、その「談話室」に「現代人の証明」と題して雑文を記している。私が2度目の勤めで本学に赴任したのは昭和59年。早くも33年を経過して来春定年を迎えることとなり、再び「談話室」に短文を寄せることになったという次第である。

本学における教員生活をふりかえると、粗忽且つ天邪鬼な性格で、ハラハラされた方もおられたが、大きな躓きはせず、無事に定年を迎えることとなりそうである。教員の本務は、教育とそれを裏付ける研究、さらに学内業務、社会的活動も不可欠とされる。この間、概して意欲ある学生たちと楽しく過ごすことができた。3年次はまだよそよそしいが、4年次になると打ち解け、夏休みの合宿は楽しいひと時となった。大学院生との時間も充実したものであった。前近代史にくらべれば、近代史の層は薄い、それぞれ精進し、成果を収めている。初期の院生は、課程博士を出す仕組みが整っていなかったため学位を持っている卒業生は少ないが、10人の学位論文の主査を務めた。学位の有無を問わず、なお不本意なところに勤めざるを得ない状況にあるOBがいることを思うと、胸が痛む。

「談話室」に記した「現代人の証明」の一つは、パスポートの取得である。私が初めて海外に出かけたのは昭和61年の夏だった。前年秋以降、1ドル250円台から150円台へと円高が一挙に進み、外国に容易に行くことができるようになった。各所からの助成金を得て、夏になると海外調査に出かけた。その調査をもとに、海外における総合商社の活動を研究した。もう一つの柱は、関東地方の地域研究であった。機会あるごとに、人々と自然が織りなしてきた地域の面白

さ、豊かさを訴えているが、その思いは首都圏のいくつかの自治体史に参加させていただいた成果である。それを踏まえて、平成6年、友人たちと共に首都圏形成史研究会、学内においては平成13年に渋谷学研究会を組織し、両研究会ともそれなりの活動を継続している。

社会的活動は、この自治体史編さん事業への参加が大きい。近世・近代史研究は膨大な資料を扱い、それらは公的機関に所蔵されていることが多い。筆者は横浜市との付き合いが長く、平成23年からは横浜開港資料館・都市発展記念館・ユーラシア文化館の館長を務めている。もう一点付け加えるべきなのは、文科省の教科書検定審議会委員である。これに関して書くべきことは多々あるが、概要は『千葉史学』第68号（28年）に記しておいた。

「経歴一覽表」なる、私が経験したいわゆる「諸委員」がずらっと並んでいるものをいただいた。63年に学生部委員とある。かつての学生部は頻繁に顔を会わせ、「同期」としての連帯感を共有したという。私は現学長、赤井さんと同期だった。当時の部長が特殊な方で、私たちは何度かストをおこした。赤井さんは若い頃結構怒りっぽかったが、決して「投げない」性格を見て、彼は私とは違う、と認識した。研究室が同じ常盤松二号館四階ということもあり、当時の資料室員に「赤井さん居る？」と言って、しばしば訪ねる関係になった。こんな学生部員だったが、神道の土田先生が学長に就任されて学生部長に指名され、平成7年から1期2年間、部長を務めた。まだ大変な時期であった。ずけずけ言うものだから、学生たちと軋轢を起こし、学生新聞や立看に似顔絵入りでいく度も「糾弾」されたものである。一番ひどかったのは、たまプラーザの公道で襲撃事件が発生したことであった。よく覚えているが、学長から「もう一期」と言われたが、委員長が夢の中に出てくるほどだったので無条件に辞退した。

大学の役職でもう一つ大変だったのは、安蘇谷学長の時である。前任の阿部学長が急逝され、安蘇谷さんが就任された。一期目は3年任期で、私の国内派遣の時期と重なった。派遣中の新年会に出席し、安蘇谷さんと帰る方向が同じであるため、二人でお茶を飲んだ。それがよくなかった。復帰早々就職部長、2期目には学長補佐室を作って補佐室長をいいつかり、赤井さんなどと共に大学の内部改革のいろんなことにかかりあうことになった。ただこの頃のことは、まだ憚らねばならないことが多い。

ちょうど紙数も尽きたようである。本学が建学150年、200年を盛大に迎えられることを祈念するばかりである。

（日本近現代史）